

平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	23K15	氏名	森田 純
研究主題 —副主題—	学級経営に影響を及ぼす教師・児童関係とその評価方法		
所属校	八王子市立南大沢小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>本研究は、児童がどのような傾向の学級で居心地良く過ごしているのかを明らかにすることで、学級経営を自己評価する時の指針の一つとして提案することを目的とする。</p> <p>教師が学級経営について振り返りを必要とする時は、学級崩壊やいじめ等が起こる危機的状況時となる。危機的状況において原因を探ることは辛い作業であり、学級経営をやり直すには時期を逃している可能性が高い。だから危機的状況に陥る前に日常的に学級経営の効果を評価し習慣的な指導を見直すことが必要なのである。更に学級経営の自己評価から課題発見ができれば指導改善が可能となるにもかかわらず学級経営の評価は未成熟である。そのために児童の学級における居心地と教師の学級経営傾向との相関を追究することとした。</p> <p>従来の学級経営論には教師と児童の上下関係を基本とし、ルールや決まりの徹底を図る指導重視型と教師と児童の水平関係を基本とし児童の思いを何よりも尊重する児童尊重型がある。一見対立的に捉えられる論であるが、実は両立場の論者はいずれも上下・水平関係の双方について暗黙的にはあるが互いの存在を認めている。そこで本研究では学級経営の理想モデルとして上下・水平のバランスのとれた統合型モデル、なかでも横藤雅人<sup>(1)</sup>の学級経営を織物の比喻で捉える論を基軸とした。横藤は、学級経営において織物の縦糸に相当するものは「教師と子供の上下関係を基礎とするしつけや返事、敬語、学級内ルールなどの関係づくり」、横糸に相当するものは「教師と子供のフラットな心の通い合い」と喩えている。さらに縦糸と横糸を豊かに織り込んでいくことが学級経営であると言いき、織物として仕上がった時には上下関係に相当する縦糸は見えなくなり、水平関係に相当する横糸が色鮮やかに浮かび上がるとことと共に、縦糸が緩んでいると横糸が張れないと、教師の経験知を巧みに表現している。そこで本研究では、この織物モデルに基づいて、教師の学級経営のスタイルを明らかにして、そのスタイルが児童の学級での居心地に与える影響を検証するための質問紙調査を実施することとした。</p> <p><small>(1) 横藤雅人・野中知行『必ずクラスがまとまる教師の成功術！学級を安定させる縦糸・横糸の関係づくり』学陽書房 2011</small></p>
II 研究の方法	<p>(1) 児童の学級満足度調査実施 小学校 40 学級 1225 名の児童に「児童の社会性を見取りと学級の様相を把握する児童用自己評価シート<sup>(2)</sup>」を実施した。このシートは児童の自己評価結果を基に「連帯意識から見た学級」をグラフ化できるものであり、学級集団を「機能面（学級内での役割を果たす）」と「情緒面（学級内で気持ちが通じ合う）」の二つの側面から捉えることができる。この両側面が高ポイントであるならば、児童の学級における満足度が高く、望ましい学級集団が経営されていると言える。この調査結果より高ポイント群を学級経営順調群、低ポイント群を学級経営困難群とした。さらに児童の満足度調査は担任教師にも行い、教師の考える児童の満足度と児童本人の考える満足度の差異にも注目して相関関係を調べることにした。</p> <p>(2) 教師の学級経営傾向調査 上記 40 学級のうち、36 学級の担任に学級経営の上下・水平関係の達成を問う質問紙調査を実施。</p> <p>(3) 両調査の結果分析 学級経営順調群、困難群の教師の学級経営スタイルはどうなっているのかを明らかにするために児童の満足度調査で得た児童の満足度の結果と教師の学級経営傾向調査で得た教師の学級経営スタイルとの相関関係を調べた。</p> <p><small>(2) 瀧口 信晴「児童の社会性の育成における評価についての研究」</small></p> <p><small>『東京学芸大学教職大学院 課題研究成果報告書』51 - 55 頁 2008</small></p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>(1) 児童の満足度調査実施 (児童数 1225 名) 学級経営順調群困難群の抽出  (2) 教師の経営傾向調査結果 (40 学級中 36 学級の担任が回答)  教師 36 名の平均値は水平関係達成度が 30.35、上下関係達成度が 29.85、60.12 となった。水平関係達成度の方がやや高いことから、教師は水平関係を達成することの大切さを意識していることが分かる。  (3) 児童の満足度調査と教師の学級経営傾向調査の相関関係分析  ①教師の上下水平達成度と児童の満足度の相関  児童の満足度が高い教師の指導傾向を明らかにするために児童の満足度平均点と教師の経営傾向調査の相関をとった。その結果、上下関係達成度と児童の満足度平均点についての相関係数は-0.0004 となり、平均点の高低にはほとんど相関がない。その一方で水平関係達成度と平均点の相関係数は-0.42 となり、水平関係を高く達成していると回答した教師の学級ほど平均点が下がる傾向が明らかになった。学級経営において水平関係を達成しようとするのが却ってマイナスに作用していることが示唆される。  ②教師の経営スタイルと児童の満足度の相関  上下関係達成度と平均点に相関がないとすると統合型モデルの実証ができないために上下関係達成度と水平関係度の差と児童の満足度平均点との相関をとった。この相関係数は 0.46 と出ており水平関係優位型より上下関係優位型の教師の学級の方が、児童の学級に対する満足度が上がることになる。  しかし、上下関係優位型が強まりすぎると平均点が下がる傾向も示唆される。つまり、学級経営には上下関係優位型が有効ではあるが、上下・水平のバランスを欠くと学級経営は順調には進まないことを表している。  ③児童の満足度のばらつき (分散値) と上下・水平関係達成度との相関  児童の満足度のばらつきに注目した。何故なら平均点が高くても、児童の満足度に差があるならば学級経営が順調であるとは言えないからである。上下・水平関係達成度と児童の満足度分散の相関係数はどちらも低いながら、上下関係達成度との影響が示唆された。特に上下関係達成度と児童の満足度の情緒面における分散 (気持ちを通じ合う面のばらつき) との相関係数は -0.318 となった。また水平関係達成度と情緒分散の相関係数は -0.066 であり、児童の満足度の情緒面での差には水平関係より上下関係が影響しているという事になる。  (4) 教師の学級経営自己評価  児童の満足度平均点と教師の予測値と児童の実際の平均値の差との相関係数は 0.46 となり、自分の学級の児童の様子を児童の実際の評価より厳しくみる教師の学級の方が、児童の満足度平均点が上がる結果となった。過信して評価を行うより謙虚に評価できる教師の方が児童の満足度が高いという事になる。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>児童の学級満足度調査と教師の学級経営傾向調査の相関関係についての追究を行い三点が明確になった。①児童の学級満足度が高い教師の経営スタイルは教師と児童の上下関係を確立し水平関係も確立している指導である。②児童の学級満足度が低く、友達関係を育みにくい学級経営スタイルは水平関係に偏る指導である。③学級経営における自己評価には過信より謙虚さが必要である。</p> <p>以上の結果から得た新たな知見は、児童間のつながりを深め、児童の満足度を上げる学級経営を行うためには水平関係より上下関係を優先させた指導が必要となる事である。これは、児童間のつながりを深めるためには児童との水平関係に基づく指導が有効であるという常識的見解とは一線を画すものである。一方で学級経営を行う時に「教師と子供の上下関係を基礎とするしつけや返事、敬語、学級内ルールなどの関係づくり」となる縦糸 (上下関係) と「教師と児童のフラットな心の通い合い」となる横糸 (水平関係) が必要であるという横藤の織物モデルに象徴される教師の経験知を実証的に裏付ける結果となった。今後の学級経営において教師と児童の上下関係に基づくルール作りを無視できないということになる。</p> <p>自己評価においては、教師自身ではできていると感じていても児童はそう感じていない場合に児童の満足度が下がるという結果が教えてくれるものは大きい。自分の学級経営に自信をもつことが、かえって自分の学級の現状を見えにくくしてしまうということになる。学級経営を自己評価する時には厳しく見ることによって自己の弱点が見えてくることになると考えられる。</p>